

【研究報告（2019年度）】

チーム② 学童期・思春期の学校適応支援・活力ある人間形成の研究チーム（②-1）  
「生きる力」が育つ学校文化を創る

松永邦裕<sup>1,\*</sup> 徳永 豊<sup>1</sup> 本徳勇氣<sup>1</sup> 皿田洋子<sup>2</sup>

1) 福岡大学人文学部、2) 福岡大学、\*) チーム責任者

要 旨

本事業は児童・生徒の適応に関する諸問題の背景にある対人関係の希薄さ、問題への処理能力の乏しさ、さらに自尊感情の低さに対して、臨床心理学的な方法論である Social skills training（以下、SST）を実施し、児童の日常生活を充実させる活力をつけようとする取り組みである。

2017年に開始し3年を終了した。3年度を振り返ると、児童たちはSSTの授業で積極的に発言して、練習したことを学級や、放課後に応用して実行するようになっている。また、教員も日ごろの指導にSSTを取り入れて行く姿勢が見られた。

1. 緒 言

現在の子どもたちが抱える問題の要因には、人間関係の希薄さや問題への対処力の乏しさ、などが挙げられる。本事業は、子どもたちが抱える問題点をSSTによって改善し、学校や家庭が子どもにとってより楽しく過ごせる場となるように2017年から3年計画で開始した。SSTを3年間体験した子どもたちにどのような変化がみられたか、担任教員がSSTをどう評価しているのか等について検討する。

2. 方 法

1) 対象

A市内B小学校6年生全クラスの約150名

2) SSTの実施の流れ

①インストラクション、②ターゲットスキルのモデリングの提示、③ロールプレイを用いた練習、④みんなでよかった点を発表、⑤さらによくする点をみんなで考える、⑥もう一度改善点を取り入れて、ロールプレイを用いた練習、⑦みんなからよかったところを発表、⑧練習したことを実際に学校や家庭で試みる、である。

練習した内容を実行したことをモニタリング出来るように、「宿題」という形で児童にプリントを配布し、1～2週間程度で回収した。回収したものにコメントし、次回のSSTで全体にフィードバックを行い返却した。

実施者は訓練を受けた教育・臨床心理学科の学生および教育・臨床心理専攻の大学院生で、各教室に学生3名が入り、一斉に実施（1回45分）した。

3) 評価

「社会的スキル尺度」と「自尊感情測定尺度」

4) 外部評価に対して改善を図った内容

①SST実施に際しては、毎回のSST実施前に打ち合わせを行い、教員と協働で進めた。また、担任へのインタビューで、この実践が、教員自身の指導方法にどのように役に立ったか、学校で実施する上での課題や留意点などについて整理し、学校教育におけるSST実施の意義と課題について整理する（3学期末に実施予定）。

②学校教育におけるSSTの普及を目的に、本実践の報告を兼ね、A市小中学校の教員を対象にしたSSTのワークショップを実施した。

## 5) 研究倫理

福岡大学研究倫理委員会承認「研究課題名：児童・思春期の学校適応・活力ある人間形成に関する研究」研究倫理審査承認番号：18-12-02

## 3. 研究結果

### 1) 実施回数

1 学期に 2 回、2 学期に 2 回、3 学期に 1 回

### 2) 実施したターゲットスキル

1 学期：上手なあやまり方

2 学期：イライラのコントロール

3 学期：わからない時に上手にたずねる

### 3) 効果検証

「社会的スキル尺度」と「自尊感情測定尺度」を用いて効果の検証を行った。SST 開始時からの変化を見るもので、今回の報告は昨年度末の 5 年生終了時と比較した結果である。

「社会的スキル尺度（小学生版）」15 項目の変化をみると、「友達と離れ、一人だけで遊ぶ」

「友達の遊びをじっと見ている」「休み時間に友達とよく喋る」の 3 項目に大きな改善が認められた。「自尊感情測定尺度」22 項目の変化では、「私は他の人の気持ちになることが出来る」「人に迷惑がかからないよう、一旦決めたことには責任を持って取り組む」「私には自分のことを必要としてくれる人がいる」の 3 項目に多少の改善が認められた。

### 4) 担任教員らの評価

学年末の 3 月に担任 4 名に個別で 1 年間の SST を振り返ってもらい、15 分の半構造化面接を実施した。その結果、「SST で使った掲示物を見て、自分がスキルを発揮できているか確認する子がいた」「話す機会が多くなった」などポジティブな変化が語られた。また、担任自身が授業で SST の要素を取り入れ指導に役立てたり、帰りの会で子どもたちに社会的スキルが活用できていたかどうか振り返らせるといったことを実施していたことが語られた。

## 4. 考 察

6 年生になり、児童の応用が利くようになったため、ロールプレイで、アドリブが出来るような設定を行ったこともあり、児童たちは自由に SST の時間を過ごし、より現実的な課題の設定を行い練習が出来ていた。前年度はクラスによって宿題の回収率に差があったため、宿題が実行しやすいようにプリントを工夫したこともあり、記載の内容が豊かになり、宿題の実行率が高まったと考えられる。

尺度を用いた評価の結果から、練習したことが活かされ、社会的スキルの向上、自信、自尊感情の向上に役立っていることが認められた。

また 5 年次の担任インタビューから SST を体験することによって子どもたちは、積極的にコミュニケーションを取るようになり、自分自身が社会的スキルを使用していることを認識するようになったことが明らかになった。担任教員も、SST の要素を日頃の指導に取り入れるなど児童への影響だけでなく学校文化に対しても SST の有用性が確認出来た。

次年度は研究結果をまとめ、学会等で発表し、全国の学校関係者に周知する。

## 5. 結 論

SST では日常の生活で見られる具体的な対人場面をすべての子どもが練習し、自信をもって日常で実践する。それを教員が評価し言葉かけにより強化する。この方法がスキルの獲得を促し、それによって自信、自尊感情の向上をもたらし得ると言える。

## 6. 研究発表

### 学会報告

皿田洋子・本徳勇氣：教育現場での SST—幼児教育～小・中学校—。SST 普及協会第 25 回 SST 全国経験交流ワークショップ in 徳島。

2019 年 7 月。

本徳勇氣：公立小学校における SST の実践報告—教員インタビュー調査から—。SST 普及協会第 24 回学術集会群馬大会。2019 年 12 月。